

Arcanobacterium pyogenes (A. p) が関与した乳用牛の異常産多発事例における病理学的考察

中丹家畜保健衛生所

○畑段千鶴子 黒田洋二郎¹⁾ 矢野小夜子

1)食の安心・安全推進課

【発生概要】丹後管内の酪農家(成牛60頭飼養)において、平成19年10月上旬～12月上旬まで12頭の分娩牛のうち7頭で妊娠後期の死流産が発生した。異常産3種混合ワクチンは接種済みであった。【病原検索】剖検では死流産胎子の体形、骨格筋および脳に異常は認められず、共通の所見はなかった。細菌学的検査では子牛2頭及び母牛1頭の主要臓器並びに母牛5頭の膣スワブからA. pを純培養状に分離した。病理学的検査では早産母牛の胎盤においてグラム陽性短桿菌の重度増殖を伴った壊死性胎盤炎、流産胎子の肺においてグラム陽性短桿菌の増殖を伴った膿性カタル性気管支肺炎を認めた。抗A. p血清を用いた免疫組織化学染色(抗A. p免染)において、胎盤及び肺の菌体に陽性反応を認めた。

【遡り調査】A. pによる流産胎子で肺炎を認める事例が多いため、過去10年間の原因不明異常産16件の肺を用いてグラム染色及び抗A. p免染を行ったところ、2検体の肺にA. pを認めた。いずれも胎齢190日前後で流産し、片方の母牛には当時、右後肢大腿部に化膿巣が観察された。【考察】一連の死流産の原因は、環境中のA. pが膣を介して上行性に感染したと考えられる。環境中の常在菌であるA. pが異常産の原因となること、異常産の原因検索に胎盤および肺の病変が重要であることを認識した。